

# 敬語の分類と 落窪物語の待遇表現

田 中 みどり

はじめに

一 敬語の分類

二 落窪物語の待遇表現

I 呼称

II 敬語

II-1 尊敬の助動詞ル・ラル・サス

II-2 敬語の動詞・補助動詞

a 美化語の「タマフ」

b 尊敬の「ノタマフ」

c 丁重の「申シ(タマフ)」 「聞コエ申ス」 「聞コユ」

d 強い謙讓の「マウス」 と「申請する」 意の「マウス」

e 「ソソノカシ聞コユ」 と「申シソソノカス」

f 丁重の「タテマツル」

g 補助動詞の「アソバス」

h 地の文の「ハベリ」

むすび

《落窪物語の敬語表》

一般に、敬語は尊敬語(為手尊敬)・謙讓(受手尊敬)・丁重・丁寧・美化語に分類される。しかし、尊敬には尊敬と上下関係の顧慮、謙讓には謙讓と上下関係の顧慮とがあり、謙讓語の場合、「まろ、文奉る」などのタテマツルには「謙讓」という用語を使用できるが、「中将、三の君に裳着せたてまつりたまふ」のような場合にはタテマツルは話し手が三の君を持ち上げる語であって、謙讓という用語では意を尽くさない。そこで、従来の尊敬語を「為手もちあげ」、謙讓語を「受手もちあげ」と名付ける。なお、古代の文学作品の中でも、尊敬語が話し手の品位をあらわすための語となる場合もある。

実際の例を、落窪物語で見、落窪物語の待遇表現として、《呼称》《敬語》について述べる。敬語には、尊敬の助動詞ル・ラルを用いた軽いもの、一般の敬語、セタマフ・サセタマフなどの高い敬語がある。その他、美化語の「タマフ」、丁重の「申シタマフ」 「聞コエ申ス」 「聞コユ」、強い謙讓の「マウス」 と「申請する」 意の「マウス」、丁重の「タテマツル」、補助動詞の「アソバス」 などがあり、地の文に「ハベリ」 が使用された例もある。

## はじめに

一般に、敬語は尊敬語（為手尊敬）・謙讓（受手尊敬）・丁寧・丁寧・美化語に分類される。しかし、尊敬には尊敬と上下関係の顧慮、謙讓には謙讓と上下関係の顧慮とがあり、謙讓語の場合、「まろ、文奉る」などのタテマツルには「謙讓」という用語を使用できるが、「中将、三、四の君に裳着せたてまつりたまふ」のような場合にはタテマツルは話し手が三の君・四の君を持ち上げる語であって、謙讓という用語では意を尽くさない。そこで、従来の尊敬語をへ為手もちあげ、謙讓語をへ受け手もちあげと名付ける。なお、古代の文学作品の中でも、尊敬語が話し手の品位をあらわすための語となる場合もある。

実際の例を、落窪物語で見ると、この作品は、男によって書かれたものであると考えられ、その他の王朝物語が、女の視点で書かれていて、恋愛や結婚を主軸とした世の中が描かれているのに対して、この作品では、出産・裳着・結婚・賀・隠居・葬儀などが描かれているほか、地券争いや相続争いも描かれており、権力にまつわる男同士の葛藤や応対が描かれているため、人間関係の幅に広がりがあること、また、敬語の使い方に配慮がなされていることによる。

## 一 敬語の分類

敬語は、一般に、尊敬語・謙讓語・丁寧語・丁寧語・美化語に分けられる。尊敬は「おっしゃる」など動作主体を尊敬ないし上位扱いするものであり、謙讓は「申し上げる」など自らへりくだらないし動作の対象を上位扱いするものであり、丁寧は「申す」など話し手のかしこまりを表わすものであり、丁寧は「です」など聞き手を重んじるものであり、美化語は「御」など話し手の品位をあらわすためのものである。

現代語で、

○Aさんが、おっしゃる。

のオツシヤルは、

1. 話し手のAさんへの尊敬
2. あるいは、Aさんが話し手より上位であること
3. あるいは、話し手の品位をあらわすをあらわす。

○わたくしは、Aさんに、お手紙を差し上げます。  
のサシアゲルは、

1. 話し手のAさんへの謙讓
2. あるいは、Aさんが話し手より上位であること
3. あるいは、話し手の品位をあらわす

をあらわす。

上下関係の場で、

○あなた、社長に、お手紙を、差し上げなさい。

○部長は、社長に、手紙を、差し上げる。

といえば、サシアゲルは話し手があなたや部長を社長より下位に見做し、社長をもちあげることをあらわす。

○部長は、社長に、手紙を、差し上げなさい。

といえば、サシアゲルは話し手が部長を社長より下位に見做し、社長をもちあげることをあらわし、ナサルは話し手が部長をもちあげることをあらわす。二者が対等である場合にも、

○A部長は、B部長に、お手紙を、差し上げなさい。

といえば、サシアゲルは話し手がB部長をもちあげ、ナサルは話し手がA部長をもちあげることをあらわす。

○A部長、B部長に、お手紙を差し上げて頂けないでしょうか。

のサシアゲルは、話し手がB部長をもちあげ、イタダクは話し手のA部長への謙譲をあらわす。これが、

○Cさん、Dさんに、お手紙を差し上げて下さらない？

であれば、サシアゲルは話し手がDさんをもちあげ、テクダサルは話し手の品位をあらわすためのことばとなる。ま

た、話し手と聞き手と話題の人物とが対等で、

○Cさん、Dさんに、お手紙を差し上げて下さい。

の場合には、サシアゲルは単に話し手の品位をあらわす美化語、テクダサイは丁寧語となる。このように、動作の主体と対象とが上下関係にあるか対等であるか、また話し手との関係がどのように位置づけられるかによって、サシアゲルをはじめナサル・イタダク・テクダサル、テクダサイなどの内実は変化する。

実のところ、古代語にも、このようなことはおこっている。

サシアゲルの古代語はタテマツルに相当するが、現代語ではタテマツルは、文章語で、謙譲の意味でしか用いない。そのため、古代語に接した場合に、タテマツルを謙譲と言うと、わたくしたちは、現代語の語感で、古代語を見てしまう弊がある。しかし、古代の文学作品で、

○今は昔。中納言なる人の、女あまた持たまへるおはしき。大君、中の君には婿どりして、西の対、東の対に、はなばなとして住ませたてまつりたまふに、三、四の君、裳着せたてまつりたまはむとて、かしづきそしたまふ。<sup>(1)</sup>

（落窪物語 小学館日本古典文学全集『落窪物

語 堤中納言物語 十七頁。以下同じ。）

という場合、「持」たまへ」「おはし」「たてまつり」たまふ」「たてまつり」たまは」「し」たまふ」は、書き手が中納言をもちあげるものであるが、「住ませ」たてまつり」「着せ」たてまつり」のタテマツルは、書き手が三、四の君をもちあげることをあらわすことばであつて、中納言を三、四の君より下位と見做しているわけではない。タテマツルが動詞で、動作主体が一人称、二人称、三人称の場合を考えてみると、

○まろ、帝に、文、奉る。

という場合に、タテマツルはわたくしの帝への謙讓（へりくだり）をあらわす語であり、

○君、帝に、文、奉れ。

○かぐや姫、帝に、文、奉る。

いずれも、タテマツルは君やかぐや姫を帝より下位に見做し、帝を敬う語である。これは、対者が帝という最高位の人である場合であつて、同じ高さの人同士の場合には、このようではない。

○…懷なる文の落ちぬるもえ知らず、少将、見つけたまひて、ふと取りたまひつ。御鬢かきはてて入りたまふに、いとをかしければ、三の君に、「これ見たまへ。惟成が落したりつるぞ」とて奉りたまふ。

（落窪物語 七十六頁）

は、惟成が落とした文を、三の君の夫である蔵人の少将が、三の君に手渡す場面である。この場合のタテマツルは、蔵人の少将を三の君より下位に見做しているわけではない。単に、三の君をもちあげているだけである。なおまた、

○限りなく喜びたまひて、申して、奏奉らせたまひて、

： （落窪物語 二百八十頁）

のタテマツルは、対者が帝であるので、動作主体（右大臣）を下位に置いた例、

○三日の夜、御装束は、「物よくしたまふ」とて、こ

の殿になむ奉りたまひければ、女君、急ぎ染めさせ、裁ち縫ひしたまふにも、： （落窪物語 百七十九頁）

のタテマツルは北の方をもちあげる語としてのタテマツルである。

このようであるので、古代の物語に見るタテマツルのような語を、謙讓という用語で説明しようとすると、誤解を生じる場合がある。

従来、オツシャルの「1. 尊敬」「2. 上下関係」のような用法（3の美化語の場合を除く）は尊敬語あるいは為手尊敬、サシアゲルの「1. 謙讓」「2. 上下関係」のような用法（3の美化語の場合を除く）は謙讓語あるいは受

手尊敬と称されてきた。しかし、上に述べたように、尊敬語や謙讓語とされるものにも言語場によって種々の用い方がある。このことは、古代語においても同じである。そこで、筆者は、オッシヤルの（尊敬・上下）のような語を（為手もちあげ）、サシアゲル（謙讓・上下）のような語を（受手もちあげ）とする。

## 二 落窪物語の待遇表現

○北の方、「なぞの『御とのごもり』ぞ。物言ひ知らずなありそ。我らとひとつ口に、なぞ言ふは。聞きにくく。あなわかわかの昼寝や。しが身のほど知らぬこそ、いと心憂けれ」とて、うちあざ笑ひたまふ。

（落窪物語一之巻 小学館新編日本古典文学全集『落窪物語 堤中納言物語』 八十二頁）

落窪物語は、一条天皇即位（九八六年）から枕草子成立期の間に成立したと考えられている。作者は、古くより源順説があり、三谷邦明氏は、この物語の作者の条件として「男であること、漢学の素養があること、歌が詠めること、現実を肯定的に把握する思想を懐いていること、受領階級のイデオロギーをもっていること」などを挙げ、源順はこの条件に適合しており、順ではなくとも順のような境遇に

いた人物がこの物語を書いたと思われる、としている（全集解説）。この条件は、言うまでもなく、この作品から抽出することのできる、この作品の性格である。

ただ、この作品の性格はそれにとどまらない。内容は、継子いじめ譚を下地にしながら、伊勢物語や交野の少将の物語、その他散逸した物語をふまえてパロディ化したコメディである。男君は執念深く仕返しをし（原文では「答せむ」ということばで表現されている）、そのあとに孝養する際にも徹底している。これは、他の物語には見られない構想であるという。

女君に通う人のあることを知った父の中納言が「しをり殺してよ」と言い、女君がひどい部屋に閉じ込められると男君は「ただ今もはひ入りて、北の方を打ち殺さばや」と思う。のちに男君から大納言の位を譲られた女君の父の中納言が「わが子ども七人あれど、かく現世、後生うれしき目見せつるやありつる。…我死なば、代りには、男子にもまれ、女子にもまれ、君につかうまつれ」と言うと、継母の北の方は「憎し、とく死ねかし」と思う。このような物騒な文は、王朝物語の中ではめづらしいであろう。

また、新大納言（女君の父）は参内の日の朝、三条邸に男君と女君を訪ね、ふたりを拝んで、「おのれは、おほやけもかしこくもおはしまさず。ただあが君のみこそうれ

しくかたじけなくおぼえたまへ。この世につかうまつらで死ぬとも、大方まもりともなりはべりて、など念じはべる」と言う。物語の中とはいえ、「おほやけもかしこくもおはしまさず」と書くことが可能な時代であったのであろう。（なお、「まもり」となるというのは、当時の民間信仰のひとつかと思う。）

女君の侍女のあこぎ（侍女の名前）は、継母の北の方によって、三の君のかたに召し出だされるが、その際に、「何のよしにか、こと君どりはしたてまつらむ」と泣く。「こと君どり」は、仕える側からのことばである。また、男君の仕返しに同調する衛門（元のあこぎ）に、女君が「わが人にはあらで、君の人になりね」と言うと、「さは、衛門、わが君につかうまつらむ。衛門が思ひし限りのことをせさせたまへば、げに御前よりも宝の君となむ思ひたてまつる」と言う。幼い日より仕えてきて苦楽をともにしてきたのであるにしても、侍女がこのような冗談を言うのは、他の作品では考えにくいことである。男君と女君の結婚を演出したあこぎは、生き生きと、自分の考えによって生きている人である。これも、この作品の魅力のある部分である。

この作品の待遇を考えるのは、その他の王朝物語が、女

の視点で書かれ、恋愛や結婚を主軸とした世の中が描かれているのに対して、この作品では、出産・裳着・結婚・賀・隠居・葬儀などが描かれているほか、地券争いや相続争いも描かれており、権力にまつわる男同士の葛藤や応対が描かれているため、人間関係の幅に広がりがあること、また、冒頭に掲げた北の方のことばにあらわなように、敬語の使い方に配慮がなされていることによる。

落窪物語の文章は、

地の文（叙述の部分）

会話文（会話、手紙）

内話文（心の中で思うこと）

○女君、へいとうれし」と思して、…

（二百五十六頁）

草子地（物語・草子などの中で、説明のために作者の

意見などが、なまのままで述べられている部分）

○腹立ち言ひて立ちていけば、いとど人笑

ひ死ぬべし。（百四十一頁）

○ゝとて言ひゐたることどもは書かじ。うるさし。（二百十八頁）

○書かずとも、儀式、有様思ひやれ。

などに分類することができる。それぞれの文章体に分けて、落窪物語に用いられている待遇表現を見る。

敬語の分類は、為手もちあげ（いわゆる尊敬）・受手もちあげ（いわゆる謙譲）・丁重・丁寧・美化語とする。〈為手もちあげ〉・〈受手もちあげ〉の用語を用いるのは、これまで、尊敬・謙譲の気持ちと上下関係による配慮とが混同されてきたことと、上にも述べたように、たとえば、「まろ、文奉る」などのタテマツルには「謙譲」という用語を使用できるが、「中将、三、四の君に裳着せたてまつりたまふ」などのタテマツルの場合に、謙譲というより、書き手が「三、四の君」をもちあげているというほうがふさわしいことによる。より実態を把握しやすい用語として、〈為手もちあげ〉・〈受手もちあげ〉の用語を用いる（単に「尊敬」という場合には〈為手もちあげ〉、「謙譲」という場合には〈受手もちあげ〉に入る）。

以下、落窪物語の文体にもかかわる特色のある語・用法をとりあげ、また、とくに、従来十分に説明されてこなかったものを中心に述べる。

底本は小学館新編日本古典文学全集『落窪物語 堤中納言物語』（二〇〇〇年発行。底本＝実践女子大学図書館常

磐松文庫所蔵、旧安田文庫本落窪物語四巻。以下、全集と略す。）を用いる。参考として、新潮日本古典集成『落窪物語』（一九七七年発行。以下、集成と略す）・岩波新日本古典文学大系『落窪物語 住吉物語』（一九八九年発行。以下、大系と略す。）を用いる。

なお、全集の方針により、引用文の中の「」は会話や手紙の部分、〈〉は内話文である（全集凡例）。

## I 呼称

### 第一巻冒頭に、

○「君達」とも言はず、「御方」とはまして言はせたまふべくもあらず。〈名をつけむ〉とすれば、さすがに、〈おとどの思す心あるべし〉とつつみたまひて、「落窪の君と言へ」とのたまへば、人々もさ言ふ。  
（十七頁）（傍線・筆者、以下同じ）

とあり、継母の北の方が御達に、主人公の女君を「落窪の君」と呼ばせたことが書かれている。その女君に通う人があるとわかった時、継母北の方は落窪よりもひどい部屋に女君を閉じ込め、女君のところから自分の娘の三の君のところに召し出だした侍女のあこぎを追いつくとする。しかし、三の君が反対すると、



○「あやしくあひ思ひたてまつりたる童なめり。盗人がましき童にて、くやつがへよくなさむ」とて、したるにこそあめれ。落窪はよに「心とはせむ」と思はじ。男心は見えざりつ」  
(百六頁)

と言う。ここでは、「落窪」と呼び捨てている。後に、女君が衛門督の北の方となっていることが判明し、衛門督は継母に継子いじめの仕返しをした挙句に孝養の限りを尽くすのであるが、そんな中で、女君の父の新大納言が亡くなる。その遺産の分配に不服の継母北の方は、女君（この時には男君は大将となっている）の心遣いに対して、

○「落窪の君のかくしたまふか。いであなうれしのことや」  
(二百九十三頁)

「落窪の君」と言う。長男の越前守に  
○「現心にはおはせぬか。…人聞きもわが身もものぐさるほしや、『落窪』、『何窪』、とのたまふ」  
(二百九十三頁)

とたしなめられると、

○「かくこの御方ののたまふこと。まろはいかに。心憂し。…」  
(二百九十五頁)

「御方」と言い直す。さらに後に、左大臣となった男君が、中納言で筑紫の帥として下ることになった人物を、継母の娘である四の君の夫に推薦してきたときには、間に立った

三男の少将の前で、

○「…いとうれしきことなり。かくこまかに後見るが、あはれなることをぞ。女君よりは殿こそ御心ばへあはれなれ」  
(三百八頁)

と、「女君」と言っている。このように、この作品では、人の呼称にも話し手の心理がうまく表されている。

また、地の文の中でも、主人公は「君」「女君」「北の方」などと記されているほかに、

○御車寄せたれば、口には宮、中の君、後には嫁の君と我と乗りたまふ。  
(百九十八頁)

のように、「嫁の君」と書かれていることもある。これは、女君が男君の母である大将の北の方にはじめて対面し、そのあと、男君が二条邸に帰ろうとするのを、母の北の方が自邸に誘う言葉をかけた、その次の地の文である。北の方のことも「我」（自分）と表現されている。これは、北の方の視点で書かれた地の文である。

今ひとつ例を挙げると、女君が縫った男君の装束を見た母北の方は、

○「あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそものしたまひけれ。内裏の御方などの御大事あらむには、聞こえつべかめり。針目などの、いと思ふやうにあり」  
(百六十八頁)



と誉める。「内裏の御方」とは、男君の妹で帝に嫁いでいる女御のことである。地の文では、

○かかるほどに、にはかに、帝、御心地、悩み重くて、おりたまひて、春宮位につかせたまひぬ。この男君の御妹の女御の御腹の一の宮になむおはしける。その御弟の二の宮、坊にゐさせたまひぬ。

御母の女御、后にたちたまひぬ。(二百五十七頁)

と、「男君の御妹の女御」であつたり「御母の女御」であつたり、そのときの話の中心にしたがつて、呼称が変わっている。

このようであるから、この作品において、登場人物の呼称は、役職・立場の変化、他者との関係、書き手の位置によって、千変万化、さまざまに変わる。以下に男君を例に掲げる。

(A) 男君の呼称

役職・立場による呼称(地の文)　書き手は、物語の外から書いている。

…右近少将・中将・中納言・衛門督・大納言・大将・左の大臣・太政大臣・大臣

他者との関係による呼称(会話)

…殿・中将・大将殿の中将・中将殿・衛門督・衛門督殿・衛門督の殿・督殿・大将

殿・左の大臣の上・左の大臣・大殿・太政大臣

これ・この殿・かの殿・かの大殿・あの殿  
君・あが君・わが君

道頼(自称)

書き手の位置による呼称(地の文)　書き手が物語り内部に侵入する。

…中将殿・督の殿・督の君・大納言殿・大将殿・左の大臣殿・男君・父大殿

この作品の中の人の呼称およびそう呼んだ人との関係を描けると膨大な量となるため、省略する。次に人称代名詞を中心とする呼称について述べる。

(A) の他者との関係の項目に「道頼」がある(二百四十二頁)。これは、男君が女君の父の中納言に正体をあらわし、のち、中納言を自邸に招いて、これまでの経緯を述べるときの自称である。相手の中納言も「忠頼」と名を用いている。自分の名を名のるのは、ここで、ふたりが親子関係になったことを表明するものである。

この男君は、従者で乳母子の帯刀を「惟成」と呼んでいるのであるが(三十二頁、これは目上の者から目下の者への呼び方である。帯刀はまた、母の御乳母の前で、「惟成」

と自称している。

○「…惟成ら侍らば御身一つはつかうまつりてむものを。かやうの御心持たる人はいと罪深かなり。また

聞こえたまはば、惟成法師になりなむ」(百九十二頁)

この場合も母子の会話であるので、帯刀は名を名のつてゐる。<sup>③</sup>

ところで、この部分の全集の訳は、「惟成たちがおりますから、…」となつてゐる。しかし、この段のすぐあとに「おとど、独り子なりければ、かく言ふを、へいといみじ」と思ひて、…」とある(百九十三頁)。惟成は独り子なのである。であれば、「惟成ら侍らば」も単数で、「惟成がいますから」ではないか。普通、年老いた親をお世話するのは子どもであるからである。二百五十頁に四の君が三の君に対して、

○「まろら、このごろ憂きこと出で来にし折ぞ、へ尼になりはべりなむ」と思ひはべりしを…」

と言う例があり、この場合「まろら」は単数である。また、三百八頁の三男少将から母の北の方へのことば、

○「…数ならぬ景政らだに、女は見まほし、知らまほしくなむあるを、…」

を、全集が「人並でない景政でさえ、女をあれこれと見たく知りたくておりますのに、…」と訳してゐるように、こ

の場合も単数である。これらのラは「かしこまり」のラである。「惟成ら侍らば」のラもこれと同じである。<sup>④</sup>

(B) 会話文の中の人称

○ 殿上人・宰相などを、ただ名の名をいささかつつましげならざいふは、いとかたはなるを、きようさいはず、女房の局なる人をさへ、「あのおもと」「君」などいへば、めづらかにうれしと思ひて、ほむることぞいみじき。

殿上人・君たち、御前よりほかにては、官をのみいふ。また、御前にては、おのがぢものをいふとも、きこしめすには、などてか、「まろが」などはいはん。さいはんにかしく、いはざらんにわろかるべきことかは。

(枕草子 岩瀬文庫蔵柳原紀光筆本 二百六十

二段 岩波日本古典文学大系『枕草子 紫式

部日記』二百七十四頁)

【一人称】マロ・ワ・フレ・オノレ・ココ・コレ

枕草子にもあるように、マロは身内の中で使う呼称である。男女ともに用い、夫婦・親子・兄弟姉妹に使われているほか、男君から母君のいとこの兵部の少輔に使った例、

御達の侍従がかつての恋人の越前守に使った例が見られる。男君は従者の帯刀にはワレを使うが、女君の前ではマロを使っている。複数形はマロラである。

○「…御女ども多く、まろらも行く先侍れば、…」

(百四十二頁)

なお、四の君が三の君に語った、

○「まろら、このごろ憂きこと出で来にし折ぞ、へ尻になりはべりなむ」と思ひはべりしを…

(二百五十頁)

のマロラは単数である。このラは、上にも述べたように、「惟成ら」「景政ら」のラと同じく、「かしこまり」のラである。

ワレは一般的な一人称である。継母北の方は使っているが、女君は使っていない。故大納言の遺言には、

○「わが、かく、しおく」 (二百九十二頁)

(読点・筆者。全集本文では、ここに読点はないが、読解の便宜のため、読点を加えておく。)

と、主語ワの形もある。連体するものでは、「わが曹司」「わが殿」「わが人」「わが子」「わが兵衛佐」は「わたくしの」であるが、「わが左の大臣の上」「少将から母北の方」は尊敬、「あこぎから女君」「男君から女君」の「わが君」や「吾子(あこ)」「あが君」は敬愛をあらわす。

○「わが心を心とする者は、かかる目見るぞよ」

(百三頁)

は、「自分の心(我意)」。また、清水詣での折に、継母北の方一行が少将一行に局を占拠されたため、大徳に他の局がないか尋ねた際、大徳は、

○「…よろしき人ならばこそ『もしや』と言ひはべらめ、ただ今の一の者、太政大臣もこの君にあへば、音もせぬ君ぞや。御妹、限りなく時めきたまひて持たまへり。へわが御おぼえばかり」と思すらむ人、うちあふべくもあらず」

(百七十六頁 百七十七頁)

と言う。この「わが御おぼえばかり」は「自分一人だけが帝の寵愛を一身に受けている」の意である。ワレの複数形はワレラ。

次にオノレは、男の使用の多い中、継母北の方は夫や娘の前で「おのれ」と言っている(継母北の方は、時により、マロであったりワレであったりオノレであったりする)。ガの接するものでは、「おのが聞こえむこと」「おのが方様」「おのがために」「おのが家」「おのがもと」「おのが子」の例があり、「自分がく」「自分のく」の意である。

○「いとわりなき。おのれが子の限りを、事のはじめには、いかがしはべらむ」

(左大臣から太政大臣) (三百四十頁)

の用例もある。これは、「自分の子」の意である。「おのが子」の場合には「おのが」で一語に近く熟合しているのであるが、「おのれが子」の「おのれが」は二語である。

ココは、場所代名詞から転じたもので、相手との間に少し距離をおいた表現である。女君は「ここ」を使っている。また、男君から侍女のおこぎや中納言供人に対しても使っている。男君が兵部の少輔に「まろ」を使う例があったが、兵部の少輔は男君に対して「ここ」を使っている。身内として気軽に話しかける男君に対して、兵部の少輔のほうはかたくなな態度であることをあらわすものである。

○「…〈面伏なり、これが子と知られじ〉と思ひてはべるにやあらむ。…」  
(二百四十一頁)

不面目だ。自分(中納言)のようなつまらない者の子であることを女君が恥じて、知られまいと思つていいのか

のように、コレの例もある。

【二人称】御前・御身・ソコ・君・真人・クソ

「御前」は、御達から女君や、越前守から母北の方に使われ、越前守から母北の方、母北の方から四の君に「御身」が使われている。

○「人のために申すにもあらず、御身のためのことな

り。…」

〔越前守から母北の方〕(二百九十五頁)

の場合の「御身」は本来の「身」の意味が強く、「母上ご自身」である。

ソコは場所代名詞から転じたもの。「あこぎからをば」に使っている例があるから、相手を敬う意をもったものであろう。複数形ソコタチ。複数形がタチを伴っていることでも、このソコが敬意をもったものであることがわかる。ただ、女君はあこぎに、

○「そこに知りたらむ」とも思はず。…」(四十五頁)

のように、ソコを使っている。女君は、後の「II-2 a 美化語の「タマフ」の「タマフ」の例に見られるように、御達にも丁寧なことばづかいをする人である。このソコも品位をあらわす語である。

ほかに、〔男君から兵部の少輔〕に「君」、〔中納言の従者から男君の従者〕に「真人たち」、〔継母北の方から少将〕に「くそ」がある。

○「など、また真人たちのかうする。いたうはやる雑色かな。豪家だつるわが殿も中納言におはしますや。一条の大路も皆領じたまふべきか。強法す」

(二百四頁)

の「わが殿」は相手方の殿をさすもので、ワガは「自分の」の意。

また、呼称ではないが、「このまかる者ども」「雑色どもから忍びの男君と帯刀」という尊大表現もある。

【三人称】カ・カレ・ソレ・コレ・人・アナタ／クヤツ・スヤツ

三人称には、「カ」「カレ」「ソレ」「コレ」のほか、「人」がある。

○「くそも人も、この殿おはせむ限りは、えやすくすまじかめり。…」

〔継母北の方から三男の少将〕(三百二十頁)

※「くそ」は二人称。人は四の君を指す(全集では「人」は四の君、大系では播磨守などを漠然とさすか、と注している。集成では、「なにごとくも、この殿おはせむ限りは、…」と、本文が異なっている)。

父の中納言が女君に言った、

○「いなや、この落窪の君の、あなたにのたまふことに従はず、あしかんなるはなぞ。…」(八十六頁)

のアナタは継母の北の方を指す。

なお、「(一)落窪物語の待遇表現」のはじめに掲げた

○しが身のほど知らぬこそ、いと心憂けれ(八十二頁)のシは、指示代名詞から二人称・三人称代名詞となったも

のであるが、この場合は再帰代名詞「自分(の)」である。また、「くやつ」「継母北の方の言 あこぎのこと」「継母北の方の言 女君のこと」「男君の心内 典葉助のこと」・「すやつ」「継母北の方の言 女君のこと」がある。クヤツ・スヤツは卑罵表現である。<sup>(6)</sup>

(C) 親族名称など

【親族名称】

「御族ぞう」「類」「祖父おほぢ」「故舅おほぢ殿」「母方の祖父なりける宮」「父てゝ」「御叔父」「御母」「御母君」「御婿」「夫をとこ」「妻め」「御夫」「御妻」「嫁の君」「御ゆかり(嫁)」「御人(お婿様)」「御北の方」「御子」「御女」「御太郎」「弟おとと」「御弟おとうと」「おのが子」「御はらからの君達」「御はらからども」「ひとつはらから」「こ」と子ども(ほかの子供)」「異御子／他御子」「継子」「継母ままはは」「いとこ」など。

このうち、「はらから」は異母兄弟にも用いている。同腹は「ひとつはらから」、異腹は「異御子ことみこ」「異兄弟ことはらから」である。

○御妹の女御の御腹の一の宮

「御腹」のほか、女君が男君に言ったことばとして、

○『まろを思さば、この腹の君達を男も女も思ほせ』

(三百八頁)

「この腹の君達」(継母北の方腹のお子様たち)や

○わかうどほり腹の君

(十七頁)

「わかうどほり腹」(皇統家腹)という表現もある。

## 【その他】

結婚のことを「御婿どり」、婿を「まらうと」と言うのは婿入り婚であるからである(なお、男が求婚することを「きこゆ」、女が結婚することを「夫(をとこ)す」、男が通うことが継続することを「住む」、親の承諾なしに女を連れ出す結婚を「盗む」と言う)。妻の家は「女(め)がた」。独身を「やまめ」。

三の君の御達を「三の御方人(かたうど)」、他の主人に仕えることを「こと君どり」と言う。

自身は「みづから」「おのれ」、ご自身は「御みづから」、ご本人は「正身(さうじみ)」。身の上を「御上」。「足づから」は「自分から(足をはこんで)」。

おふたりは「二所」。君達を「殿ばら」というほかに、

○をばの殿ばら宮仕へしけるが、今は和泉守の妻にて  
ゐたりける (五十頁)

「をばの殿ばら」の例もある。

ワタクシは「私個人」の意で、オホヤケは「朝廷」「帝」

の意で用いられている。「おほやけおほやけしく」は「公然と」、また、「最愛の妻」の意で「わたくしもの」の例もある。

## II 敬語

敬語には、尊敬の助動詞ル・ラルを用いた軽いもの、一般の敬語、セタマフ・サセタマフなどの高い敬語がある。その他、美化語の「タマフ」、丁重の「申シ(タマフ)」「聞コエ申ス」「聞コユ」、強い謙讓の「マウス」と「申請する」意の「マウス」、丁重の「タテマツル」、補助動詞の「アソバス」などがあり、地の文に「ハベリ」が使用された例もある。

### II-1 尊敬の助動詞ル・ラル・サス

助動詞ル・ラルを用いるものは、軽い尊敬である。

ル これはいつよりもよく縫はれよ。(二十六頁)  
ラル かの母北の方一人持たるを、せめて心苦し

がりて、添へらるるなめれば、：

(三百三十三頁 三百三十四頁)

これが尊敬の動詞に接する時は、高い尊敬となる。

ル 「…『しばしな渡しそ』と仰せらるれば」とて… (二百十九頁)

助動詞サスは、尊敬である。巻之四の中納言が大納言の位を受けるところに出てくる。

○喜びに、起き立ちて願立てさす。「定業の命にても、給へ」と、心にも願立てさするけにや、少しおこたりて、… (二百八十一頁)

これを、全集では、

◇新大納言は喜んで床から起き上がり、神仏に願を立てさせなさる。「前世から定まっている寿命でも、どうか延ばしてください」と、ご自分の心からも深く願を立てさせなさったゆえであろうか、少し病氣もよくなつて、…

と使役に訳している(ただし、あとに「なさる」を付けているのは、使役・尊敬どちらにでも解釈できるように、との考えからかもしれない)。大系でも、「よろこびをきたちて、願立てさす。」には

◇喜び起き立つて(仏に)願を立てさせる。

(二百三十七頁)

と注し、「心にも願立てさするけにや」には

◇(自分の)心においても願を立てさせるしるしにか。

但し文脈がやや分かりにくい。 (二百三十八頁)

と注し、いづれもサスを使役と考えている。ここで大系が「但し文脈がやや分かりにくい。」と述べるように、「自分の心においても願を立てさせる」というのは、意味が通らない。集成では、

◇忠頼は感謝表明のために病床から起き上がり、神仏に願をお立てさせになる。寺社へ人を代参させたのであろう。下に「心にも願立てさする」とあるのは、人にも願を立てさせ心にも願を立てた、の意。

(二百四十一頁)

と注する。^「心にも願立てさする」とあるのは、人にも願を立てさせ心にも願を立てた、の意。^とあるのは、意味はわかるが、原文からこのようには訳せない。こは、「新大納言が、人に寺社は代参させて願を立てさせ」、「自身の心の内でも願をお立てになつた」ということで、はじめのサスは使役、あとのサスは尊敬とすれば意味は通る。ただ、続く二文に使役の「立てさす」と尊敬の「立てさする」が出てくるのは不自然なため、全集・大系・集成ともふたつとも使役のサスとしたのであろう。両者とも尊敬と考へればどうであらうか。はじめのサスは「新大納言が、人に代参させて神仏に願をお立てになり」、あとのサスは「自身の心の内でも願をお立てになつた」ということにな



る。これで、続く二文に使役の立テサスと尊敬の立テサスルが並ぶことは避けられる。

つまり、この2例は、いづれも尊敬のサスである、と考える。

## II-2 敬語の動詞・補助動詞

○今は昔、中納言なる人の、女あまた持たまへるおはしき。大君、中の君には婿どりして、西の対、東の対に、はなばなとして住ませたまつりたまふに、  
「三、四の君、裳着せたまつりたまはむ」とて、  
かしづきそしたまふ。  
(十七頁)

落窪物語はこのように始まる。全集では「三、四の君、裳着せたまつりたまはむ」を中納言の会話として「」でくくって「三女、四女の君には裳着の式をして差し上げよう」と訳している。御達などのことばであるならば会話文と考えることもできるが、ここを中納言の会話文とすると、右の訳のように、タマフが意味をなさない。これは、「三、四の君に裳着の祝いをしてさしあげなさう」ということで、大切に養育なさる。」という、地の文である。

次に、女君が登場する段は、

○やうやう物思ひ知るままに、世の中のあはれに心憂

きをのみ思されければ、かくのみぞうち嘆く。

(十八頁)

「思され」は敬語が使われているが、「うち嘆く」には敬語が使われていない。男君のほうは、

○この帯刀の女親は、左大将と聞こえけむ御むすこ、右近の少将にておはしけるをなむ養ひたまつりける。まだ妻もおはせて、よき人の女など人に語らせて、人に問ひ聞きたまひ、ついでに 帯刀、落窪の君の上を語りきこえければ、少将、耳とまりて、静かなる人間なるに、こまかに語らせて、「あはれ、いかに思ふらむ。さるはわかうどほり腹ななりかし。我にかれみそかに逢はせよ」とのたまへば、「ただ今は、よにも思しかけたまはじ。今、『かくなむ』とのしはべらむ」と申せば… (二十一頁 二十二頁)

のように、男君には尊敬のことばを使い、対する相手には受手もちあげ・丁寧のことばを使っている。  
また、男君と女君がはじめてことばをかわしたところで、

○男君、「…」とのたまへば、からうじて、あるにもあらずいらふ。…と言ふ。  
(四十二頁)

のように、男君に尊敬のことば「のたまふ」を使い、女君には「いらふ…と言ふ」と敬語を使っていない。男君に右

大臣の娘との縁談がおこったときの描写にも、

○心のうちには、へしと、人知れず思ひて、心づきぬれど、つれなくて、へたまひやすると待てど、かけても言ひ出でたまはず。

女、へ心憂しと思ひたるけしきや、なほ少し見えけむ、中将、「…」とのたまへば、女、「…」とのたまへば、女、「…」男君、「…」と聞こえたまへり。へたしかならぬことにもこそあれと思ひて、物も言はで、やみぬ。  
(百八十七頁 百八十八頁)

「思す」「聞こゆ」など、女君に対して敬語も使われているが、敬語を使っていないものも多い。傍線は女君の叙述、二重線は男君への敬語である。そして、男君は「中将」「男君」であるが、女君は「女」である。

しだいに女君にも尊敬のことが使われていくが、このように、はじめのほうでは、女君には敬語を使っていない例が多い。

#### a 美化語の「タマフ」

タマフは「へ為手もちあげ」のことばである。尊敬・下位者から上位者・疎遠な関係に用いられる。

女君の父の中納言邸の人々や男君の父の大將邸の人々は、親子・兄弟姉妹の間で敬語を使っている。それに対し、帯

刀惟成は母に敬語を使っているが、母の乳母は惟成に敬語を使っていない。

ところで、男君（この時、中将）は、御乳母（帯刀惟成の母）を通じて縁談がもたらされたとき、

○「…今はかくて通ふ所あるやうに、ほのめかしたまへ」  
(百八十五頁)

と言う。その後、

○「…そこにさへ、かくのたまふこそ心憂けれ。ただ御為に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうやありなむ」  
(百九十一頁)

のようにも言うので、男君は乳母に敬語を使っていることがわかる。地の文でも「御乳母」と「御」をつけていて、乳母は母に準じる人として尊敬されていたのであろう。

男君がまだ右近の少将で、女君のところに通っていたときのこと。継母北の方が障子をあげよと言った際に、ためらう侍女のあこぎに男君が、

○「さはれ、あけたまへ。…」  
(七十頁)

と言っている。また、女君が落窪よりもひどい部屋におしこめられた際に、男君があこぎに出した手紙にも、

○「…なほ便宜あらば、告げられよ。さりぬべくは、必ず必ず、奉りたまひて、御返りあらば、慰むべき。  
…」  
(百十三頁)

「手紙を必ず女君にさしあげてください」と、ここでもタマフを使っている（前の文にも「告げられよ」と敬語の助動詞ラルが使われている）。他人の侍女であるから、幾分遠い存在ではあるが、他の部分では敬語を用いていない。

また、あこぎのをば和泉守の妻からあこぎへの手紙の中で、

○「おぼつかなきに、これより昨日聞こえたりしかば。  
『はやうすまじきわざして逃げたまひにき』とて、  
使をもほとと打たれぬべかりけるを…」

（百四十五頁）

と言う。全集では、右記のように『でくくつているが、この中のタマフは中納言邸の人のことばそのままであるのか、和泉守の妻があこぎに敬意をはらって「たまふ」を付け加えたものであるのかは不明。

次に、中將殿（男君）のところに、よい御達が集まり、中納言邸に仕えていた少納言も、人の引きで中將邸にやってくる。応対に出した衛門（元のおこぎ）に、

○「こと人かところ思ひつれ。むかしはさらに忘れずながら、つつましきことのみ多くて、えかくなむともものせで、おぼつかなく思ひつるに、いとうれしくもあるかな。はやうこなたにものしたまへ」

（百八十一頁）

と言わせる。これは、衛門のことばではなく、女君のことばである。ここにもタマフが使われている。上の男君からあこぎへのタマフも、この「ものしたまへ」と同列の使用法であると考えられる。

紫式部日記に、

○…うちのうへの、源氏の物語人に読ませ給ひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読み給ふべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、…

（紫式部日記 群書類従本 岩波日本古典文學

大系『枕草子 紫式部日記』五百頁）

のタマフについて、頭注に、

◇主上の言葉として式部に対して敬称を用いている点が不審がられているが、これは話し手の品位を保つための敬語であるという説に従っておく。

と言う（池田亀鑑・秋山虔 校注）。ここにもあるように、上位者が下位者にタマフを使うことはあり、品位をあらわすための敬語すなわち美化語としてのタマフがあったのである。

「あけたまへ」「奉りたまひて」「ものしたまへ」いずれも美化語としてのタマフである。

b 尊敬の「ノタマフ」

賀茂祭で、男君と中納言の北の方一行とが車争いをした後、それを聞いた男君の父の右大臣が男君に問う場面で、

○右の大臣聞きたまひて、「まことにや、しかじかはせし。…」とのたまへば、衛門督、「情けなし」と人の言ふばかりのこともしはべらず。…」とのたまへば、「人のそしりな負ひそ。さ思ふやうあり」とのたまへり。

(二百九頁)

とある(傍線は右大臣への敬語、二重線は衛門督への敬語)。ここでは父と子、あるいは右大臣と衛門督を同列に扱っている。

c 丁重の「申シ(タマフ)」「聞コエ申ス」「聞コユ」

女君の父の中納言が、男君の父の右大臣をたづねて、衛門督(男君)が三条邸を占拠したことを訴える段では、

○中納言殿、老い心地に惑ひたまひぬ。…右の大臣にまうでたまひて、「殿の御けしきたまはるべきことありてなむ参りたる」と聞こえたまへば、おとど、対面したまひて、「何事にか」と申したまへば、「…」と、いたう嘆きたるさまにて申したまへば、

：

(二百十頁 二百二十一頁)

前半、会話文にミケシキタマハル・マキル、地の文にマウ

ツ・キコユなど、右大臣に対する敬語が用いられている。

中納言の行為にはタマフが用いてある(傍線は中納言への敬語、二重線は右大臣への敬語)。後半は右大臣に「おとど、対面したまひて」「申したまへば」、中納言に「申したまへば」とあり、右大臣・中納言ともにマウスが使っている。

これは、かしこまり改まった会話であって、この場合のマウスは丁重をあらわすものである。

これに続く文章は、

○「さらに知らぬことなれば、ともかくも聞こえ申すべからず。のたまふやうにては、衛門督の無道なるやうなれど、さりともあるやう侍らむ。今は、かの衛門督に言ひて、あるやう聞きてなむ。くはしくは聞こゆべき。はじめより知らぬことなれば、そこにはいかが聞こえむ」と、いと粗相に心に入れぬけしきにていらへたまへば、中納言、また聞こゆべきかたなくて、いという嘆きながら出でたまひぬ。

(二百二十一頁)

で、ここでも右大臣は丁重に「聞こえ申す」「聞こゆ」などや尊敬の「のたまふ」、丁重の「侍り」を使っている(傍線は中納言への敬語、二重線は右大臣への敬語)。

次に、三条邸について、男君（衛門督）が父の右大臣と話し合う場面で、

○「中納言のいまして、しかじかのこのたまへるは、まことか。いかなるぞ」と申したまへば「しか。まことにはべり。…」と聞こえたまへば、「…」とのたまへば、「…」とのたまへば、「さらに言ふべきことにもあらざなり。はやくその券見せたまへ。いと〈嘆かし〉と思ひたまへり」と聞こえたまへば、「今見せはべらむ」とて、二条におはして：

（二百二十三頁）

とある（傍線は右大臣への敬語、二重線は衛門督への敬語）。右大臣のことばの中で、中納言には「のたまへる」「思ひたまへり」と敬語が使われている。右大臣の「申したまへば」は、右大臣が事件の真相を問うところであるので丁重のマウシ（タマフ）が使われている。それに対する男君の返答にはキコエタマフ、ノタマフ。そして右大臣がノタマフ、キコエタマフ。ノタマフ（おっしゃる）、キコエ（言上する）、マウス（告げる、申し上げる）が使われている。

d 強い謙讓の「マウス」と「申請する」意の「マウス」男君が、女君の父の中納言に大納言の位を譲る場面で、

○わがを譲らむの御心つきて、父大臣の御許にまうでたまひて、「かくなむ思ひたまふるを。…」と申させたまふ。「何かはさ思はむを。はやうさるべきやうに奏を奉らせよ。大納言はなくてもあしくもあらじ。わが心なる世なれば」と思してのたまへば、限りなく喜びたまひて、申して、奏奉らせたまひて、中納言、大納言になりたまふ宣旨くだしたまひつ。

（二百八十頁）

とある。

マウスはスが謙讓の意を強める例である。あとのマウスは「申請する」の意。

次に、男君が女君の父の中納言にこれまでの経緯を話す段では、

○「…何事よりも、若君たちを、まづ見たてまつらむいづら。今だに。」とのたまへば、男君の、前に立てたる几帳おしやりて、「ここに侍るめり。出でて対面したまへ」と申したまへば、恥づかしけれど、ぬざり出でたり。

（二百四十四頁）

父の中納言に「のたまふ」と尊敬のことばを使い、男君（衛門督）に尊敬「たまふ」と父の中納言に対する配慮「申し」を使い、女君には「ぬざり出でたり」と敬語を使

っていない。

e 「ソソノカシ聞コユ」と「申シソソノカス」  
男君が妹を蔵人の少将に勧める場面で

○「…間近くて聞こえ語らはむの本意ありてなむ、し  
ひてそそのかしきこえたるを…」  
(百八十頁)

「聞こえ語らふ」は「交際する」の意。ここに「そそのかしきこえたる」(縁談をお勧めもうしあげた)と出てくるが、他に、帯刀が母の御乳母に言うことばに、

○「…なほへ申しそそのかさむ」と思しめしたり。  
…  
(百九十三頁)

がある。「申しそそのかす」は、「申し上げてお勧めする」の意の謙讓語である。

f 丁重の「タテマツル」

タテマツルは「受手もちあげ」のことばである。謙讓・上下関係に用いる。

しかるに、男君(左大臣)から権帥に対して、

○かしこき御馬二つ奉りたまふ。  
(三百三十四頁)

タテマツルが用いられている。これは丁重のタテマツルである。

g 補助動詞の「アソバス」

○わが御殿に、ならはぬ独任にて、君達うち眺め遊ばして、さうざうしく思さる。  
(二百八十八頁)

「君達うち眺め遊ばして」を全集は、「お子様方の遊び相手をなさつて」と訳す。「うち眺め」は訳出されていない。大系は

○君たちうちながめ、遊ばして、…  
(二百四十三頁)

として、「若君たちをほんやり眺め」とだけ注する。集成は、

○君達うちながめ、あそばして、…  
(二百四十七頁)

として、「子供たちを眺めたり」とだけ訳がつけてある。大系・集成とも「うちながめ」で読点を付しており、集成は訳に「たり」を付けているから、「うち眺む」と「遊ばす」とは並立で、「子供たちをほんやりながめ、遊ばせて」と訳するのである。全集で「うち眺め」を訳出していないのは、その二つが並立するのが座りがわるいせいではないだろうか。

アソバスには、「遊ばせる」の意のものと、「スル」の意の敬語「アソバス」とがある。敬語のアソバスは、万葉集にすでに「松の下道ゆ 登らして 国見遊ばし(国見所遊)」(十三・3324)の用例がある。

上の例は、この敬語の「アソバス」が補助動詞として使

わかれていて「お子様方をぼんやり眺めなissant」ではないか、と考える。

#### h 地の文の「ハベリ」

物語のはじめのほうで、あこぎがをばに無心の手紙を書く。いつもをばはあこぎの要求にこたえてくれるのであるが、そのひとつ、

○あこぎがもとは、和泉の家より、

「…」

と頼もしげにはべり。見るにいとうれし。

(五十六頁 五十七頁)

とある。この「はべり」について、全集には注はない。大系の注は、

◇いかにも頼みがいありげでございます。「侍り」が地の文に出てくることは異例である。(四十一頁)

と言う。集成(広島大学蔵 柏村真直筆本)でも、

◇地の文に用いられた「はべり」の例。「あり」となっている本文や、「いへり」の誤写とする説もあるが、一二頁九行目にも類例が見えるので、『源氏物語』の草子地にも散見する「はべり」の同類と見ておく。読者を強く意識した表現。(四十四頁)

と言う。集成の一二頁九行目は、

○げにいたはりたまふことにてはべりければ、あはれに心細げにておはするを、…

というものであるが、この部分、全集では、

○げにいたはりたまふことめでたければ、あはれに心細げにておはするを… (二十頁)

となっていて、ハベリは含まれていない。

ここは、集成の言うように、草子地のハベリと考えてもよい。また、そのあとの「見るにいとうれし。」はあこぎの一人称の気持をそのまま投げ出した記述であるが、そのあこぎの一人称の視点で、「手紙にはこのように頼もしげに書いてある。」と見ていると捉えることもできよう。

この物語には、

A「薰物は、この御裳着に賜はせたりしも、ゆめばかり包み置きてはべり」とて、いと香ばしう薰きにほはす。△三尺の御几帳一つぞいるべかめる。いかがせむ。誰に借らまし。御宿直物もいと薄きを思ひまはして、をばの殿ばら宮仕しけるが、今は和泉守の妻にてゐたりけるがり、文やる。(五十頁)

Bあこぎがもとは、和泉の家より、「昔の人の御代りは、…」と頼もしげにはべり。見るにいとうれし。君に見せたてまつれば、… (五十六頁 五十七頁)



のように、一人称の気持をそのまま投げ出した記述、

C 君見たまへば、消えぬべくも灯ともしたり。几帳、屏風ことになければよく見ゆ。向ひたるは、へあこぎなめり」と見ゆる。様体、頭つきをかしげにて、白き衣、上につややかなる搔練の柏着たり。添ひ伏したる人あり。君なるべし。へ白き衣の萎えたる」と見ゆる、着て、搔練のはり綿なるべし。腰より下にひきかけて、側みてあれば、顔は見えず。頭つき、髪のかかりば、へいとをかしげなり」と見るほどに、灯消えぬ。へ口惜し」と思ほしけれど、へつひには」と思しなす。「あな、暗のわざや。人ありと言ひつるを。はや往ね」と言ふ声もいといみじくあてはかなり。「人に会ひにまかりぬるうちに、御前にさぶらはむ。おほかたに人なければ、おそろしくおはしまさむものぞ」と言へば、「なほはや。おそろしさは目馴れたれば」と言ふ。

君出でたまへれば、：

(三十六頁 三十七頁)

のように、一人称の視点で描かれた記述、

D かかるほどに、右の大臣のたまふ、「老いもて行くままに、衛府司堪へず。若うはなやかなる若男の職にてなむ堪へたる」とて、かけたまひつる大将、大納言にゆづりたまふ。御心にかなへりける世なりけ

れば、誰かは妨げむ。いとはなやぎまさりたまふこと限りなし。中納言、いよいようれしう喜ぶ。

(二百六十八頁)

のように、三人称の体験ではあるが、一人称の立場とねじれている記述、が含まれる。

A、Bは侍女のおこぎの思いであるので敬語が用いられていない。

Cは少将の垣間見の場面である。「君見たまへば：（と見ゆ）」の構文の中に、少将の目に見える・耳に聞こえることが「消えぬべくも灯ともしたり。：『なほはや。おそろしさは目馴れたれば』と言ふ。」が含まれる。敬語を用いず、少将の目に見えるもの・耳に聞こえるものを描くことで、臨場感がある。

Dは、「中納言、いよいようれしく思ほす。」あるいは「中納言、いよいよ喜びたまふ。」とすれば文意がとおるのであるが、「うれしう喜ぶ」とすることで中納言のうれしさが直に伝わる。また、敬語は他者からの間接的な描写ということであるが、中納言に敬語が使われていないことで中納言の喜びが直接伝わる。

草子地とともに、このような記述のあることで、この物語は生き生きと躍動していて、読者を物語世界に引き込んでいくのである。

## むすび

以上、見てきたように、落窪物語の中には、以下のような待遇表現がある。

### I 呼称

- ・「道頼」「忠頼」など、私には、自称として実名を名のる。
- ・「惟成ら」「景政ら」「まろら」など、かしこまりのラがある。
- ・一人称に、マロ・ワ・ワレ・オノレ・ココ・コレがある。
- ・二人称に、御前・御身・ソコ・君・真人・クソがある。
- ・ソコが話し手の品位をあらわすことばである場合もある。
- ・相手方の殿をさすのに、「わが殿」（自分の殿）もある。
- ・尊大表現のマカルモノドモがある。
- ・三人称に、カ・カレ・ソレ・コレ・人・アナタがある。
- ・卑罵表現のクヤツ・スヤツがある。
- ・さまざまな親族名称がある。

### II

#### 敬語

- ・他の主人に仕えることを「こと君どり」と言う。
- ・「をばの殿ばら」の例もある。
- ・ワタクシは「私個人」の意で、オホヤケは「朝廷」「帝」の意で用いられている。
- ・「おほやけおほやけしく」は「公然と」。
- ・「最愛の妻」の意で「わたくしもの」の例もある。
- ・尊敬の助動詞ル・ラル・サスが使われている。
- ・美化語のタマフがある。
- ・親子兄弟の間で敬語が使われている。
- ・男君は乳母に敬語を使っている。
- ・乳母の子は、母である乳母に敬語を使うが、乳母は子に敬語を使っていない。
- ・丁重の「申シ(タマフ)」「聞コエ申ス」「聞コユ」がある。
- ・強い謙譲の「マウス」と「申請する」意の「マウス」がある。
- ・丁重の「タテマツル」がある。
- ・補助動詞の「アソバス」がある。
- ・地の文にハベリが使われている。

《落窪物語の敬語表》

以上のことをふまえて、落窪物語の中の敬語の動詞・助動詞等を掲げる。

【地の文】

為手もちあげ

助動詞

ル ……マウサル  
ス ……セタマフ  
サス…サセタマフ

タテサス

動詞

イマス・オハス・オボス・オモホス・  
タテマツル・タマフ・  
ノタマフ・ウチノタマフ・  
ツカハス・マヰル・  
メス・オボシメス  
タマハス・ノタマハス  
イデオハス・  
オボシキザス・オボシタユ（絶）・  
オボシナゲク（嘆）・オボシワタル・  
オモホシタツ・オモホシマサル

補助動詞

純粹形式助動詞

接頭辞

名詞

受手もちあげ

動詞

タツネオハス・  
ノタマヒアハス・ノタマヒワタル・  
メシツカフ  
アソバス・イマス・イマスカリ・  
オハス・タマフ・マス  
オハス  
ア・御（オンあるいはオホン・ゴ・ミ）  
\*ア：我子たち  
オンタマハリ・メシ・メシオホセ  
ウケタマハル・キコユ・サブラフ・  
タテマツル・ツカウマツル・  
マウス・マウヅ・マカヅ・マヰル  
キコエサス・タテマツラス・  
マウサス・マヰラス  
ソウス（奏）・ソウセサス（奏）  
カタラヒキコユ・  
キコエカハス・キコエワヅラフ  
カタリマウス・セメマウス・  
ノベマウス・マウシチギル・  
マカリイヅ・

マキリアツマル・マキリアフ・  
マキリコム・

カエリマキル・ワカチマキル

キコユ・タテマツル・ツカウマツル

他

ト聞コユ

名詞

ツカウマツリ・マカリマウシ・  
マキリマカデ・御台マキリ

丁重

動詞

オル(下)・サブラフ・タテマツル

マウス

美化語

接頭辞

御(オンあるいはオホン・ミ)

【会話文】

為手もちあげ

助動詞

ル…オボサル

ラル…オホセラル(仰)・

ゴランゼラル(御覧)

ス…セタマフ

サス…サセタマフ

イマス・オハス・オホス・オボス・

オモホス・キコユ・

動詞

タブ・タマフ・タマハス(賜)・  
ツカハス(遣)・

ノタマフ・ノタマハス

オハシマス・オボシメス・メス・

キコシメス・シロシメス

タマハス・ゴランズ(御覧)

アヒオボス・イマシカヨフ(通)・

オハシアフ・オハシカヨフ(通)・

オボシアハス・オボシウトム・

オボシオク(置)・オボシオトス・

オボシカク・オボシカシツク・

オボシシル・オボシタツ・

オボシツク・オボシツム・

オボシナグサム(慰)・

オボシナゲク・オボシナス・

オボシマサル・オボシマス(増)・

オボシヤル・オモホシマドフ(惑)・

ノタマヒアハス

メシアツム

イマス・オハス・タマフ

オハス・オハシマス

ア・アガ・オホン・

補助動詞

純粹形式助動詞

接頭辞

名詞  
他

受手もちあげ

助動詞

動詞

御（オンあるいはオホン・ミ）

\*ア…吾子 アガ…あが君

オホン…おほん許され

オホセ

ト聞コユ

ル…タテマツラル

ウケタマハル・キコユ・サブラフ・

タテマツル・タマハル・

ツカウマツル・ツカマツル・

マウス・マウス・

マウヅ・マカル・マカヅ・マキル

キコエサス・タテマツラス・タマハル

ソウス（奏）・ソウセサス（奏）

ケイス（啓）

ウケタマハリサダム（定）・

ウケタマハリアハス・

キコエイヅ・キコエオク（置）・

キコエトル（取）・キコエフル（触）・

キコエカタラフ（語）・

ツカウマツリナオス（直）・

ツカウマツリハツ・

補助動詞

他

他

名詞

丁重

動詞

補助動詞

純粹形式助動詞

丁寧

動詞

美化語

マウデアフ・マウノボル・

マウシソソノカス

マカリカエル（帰）・

マカリカヨフ（通）・

マカリトマル（止）・

マカリワタル（渡）・イデマカル・

マキリク（来）

キコユ・キコエサス・

タテマツル・タマフ（下二段）

マウス

オイタテマツリテハ・

ヨリハジメタテマツリテ

ト申ス

ソウ（奏）・御台マキリ

サブラフ・ハベリ・

マウス・キコエマウス

ハベリ

サブラフ・ハベリ

マウデク（来）・イデマウデク

接頭辞

補助動詞

(卑罵表現)

(尊大表現)

【内話文】

為手もちあげ

動詞

補助動詞

接頭辞

受手もちあげ

動詞

補助動詞

丁寧

補助動詞

接頭辞

(卑罵表現)

【草子地】

為手もちあげ

御(オンあるいはオホン・ミ)

タマフ

エセモノ・クヤツ・スヤツ・コ

コノマカルモノドモ

オボス・オモホス・オハス・ノタマフ

オハス・タマフ(四段)

ワガ

キコユ・タテマツル・ツカウマツル・

マウス・マウヅ・マカル・マキル

キコユ・タテマツル・

タマフ(下二段)

ハベリ

御(オンあるいはオホン・ミ)

クヤツ

動詞

補助動詞

接頭辞

受手もちあげ

動詞

補助動詞

オハス・タマフ

オハス・タマフ

御(オンあるいはオホン・ミ)

キコユ・マウス

キコユ

注

(1) 全集本文では、二三、四の君、裳着せたまつりたまはむのようにへへが付してあるのであるが、(二) II 敬語 II-2 敬語の動詞・補助動詞)のはじめに述べる理由により、筆者はこのへへは不要であると考えてるので、省いた。

(2) また、儒教倫理の薄くなった現代では、尊敬・謙譲と上下関係との認識が遠くなったため、とりわけ若い人々の中には、敬語というものに違和感を覚える人が少なくない。それでも、社会生活の中では、上下関係の待遇を知っている必要にせまられることが多く、とまどいを感じることになる。そこで、筆者は、オッシヤルのような語を「為手もちあげ」、サシアゲルのような語を「受手もちあげ」と呼ぶことを提唱する。

(3) 源氏物語では、主人公光源氏の実名は、ついに知らされないままである。

(4) 大系の注(百六十六頁)に、

◇「ら」はへりくだつて名に添える。

とあり、集成の注(百六十三頁)に、

◇右大臣家などあてにしないで、私どもがついている

限り。

とあるのが妥当である。

このうは、万葉集の山上憶良の歌「憶良らは今は罷らむ  
子泣くらむ それその母も 吾を待つらむぞ」(三・337)  
から見られるものである。

(5) 「わが、かく、しおく」は、これで一文である。準体句ではないが、主格の格助詞ガがでている。このほか、落窪物語には、文の終止が連体形である例が多い。

○「∴『かのことは、いかに。御文や奉るべき』とのたまはせたりしかど、『折あしくて、今御覽せさせむ』と申しし」と言へど、∴(九十二頁)

(6) スヤツは、大系ではヤツとなっている。その注(百二十頁)に、

◇あいつは。底「やつ」、宮・近・尊・慶・斑「すやつ」とある。

(7) 「なほはや。おそろしきは目馴れたれば」のはじめのカギ括弧は、全集にはない。意を以って補う。

(二〇〇九・一〇・一二)

※本稿は、二〇〇八年度佛敎大学研修の成果である。